

献 呈 の 辞

岩井奉信先生は、令和2年8月10日にめでたく古稀を迎えられました。本学部教職員一同を代表して、心よりお慶び申し上げますとともに、ここに謹んで感謝の意を表し、本号を古希記念号として献呈いたします。

岩井先生は、昭和51年3月に日本大学法学部をご卒業後、慶應義塾大学大学院にご進学されました。その後、常磐大学人間科学部教授を経て、平成12年に本学部へご着任されてから、長きにわたり本学部の教育・研究のみならず、大学行政にもご尽力いただきました。

先生は、中村菊男先生、堀江湛先生のもとで研鑽を積まれ、日本を代表する政治学者の一人となりました。選挙研究や議会研究、政治資金研究の分野においてご活躍され、『族議員の研究』（猪口孝東京大学名誉教授との共著）や『立法過程』、『政治資金の研究』など、数多くの著名な研究業績を残されました。

また、先生は、今日の日本政治研究において欠かすことのできない取り組みを先端的に進めてこられました。その一つに、統計学の手法を用いた日本政治の分析を挙げることができます。今では、政治学における計量分析の手法が当たり前となっていますが、先生はかなり早い時期から計量分析を使用して日本の政治過程を科学的に論じられました。本学部でも、計量政治学という講座が開講されておりますが、先生は大学院生時代に理系の研究室に通われながら計量分析のスキルを身に付けられたそうです。労を惜しまず研究に邁進される姿勢は、多くの研究者をはじめ、先生の教えを授かった学生、卒業生に引き継がれています。

先生は、量的な側面から政治を捉えつつ、政治資金の質的および制度的な側面にも注目し、現実政治の問題点にも目を向けてこられました。政治に関する情報をデータとしてのみ取り扱うのではなく、それらが示し得る含意を論証することによって、政治現象をとり上げるのに際し、多角的な議論が必要であることを示されました。問題点を指摘し、その処方箋を提示するという取り組み

は、まさに政治学の学問的な有意性を体現されていたといえるでしょう。

岩井先生のご研究は、日本政治研究者にとって必読の文献となり、今なお若手研究者の指針となっています。先生は、学界の優れた研究者と肩を並べ、政治学をリードされてこられました。日本政治学会や日本選挙学会では理事を務められ、学会を支える側としての立場も担われました。また、研究者として培われた知見を活かし、さまざまな社会活動にも貢献されました。政治改革推進協議会第二委員会主査、参議院の将来像を考える有識者懇談会委員、総務省政治資金適正化委員会委員などを歴任され、政治学と現実政治とを架橋する役目を果たされました。

ご活躍はそれらにとどまらず、メディアの世界にも広げられました。政治の解説者として、新聞、ラジオ、テレビなどの媒体において、広い見識を示されています。とりわけ、政治とカネの問題が生じると、さまざまな媒体でお名前を拝見します。先生のお名前やお姿を目にして本学部へ入学を希望する学生も後を絶ちません。本学部が誇る著名な教授陣の中心的な存在として、お力を存分に発揮していただきました。

先生は、本学部の広告塔にとどまることなく、学務担当の要職を務められ、各種委員会の委員長を歴任されるなど、大学の運営にもご尽力いただきました。まさに屋台骨として、本学部の発展に貢献していただきましたことに心よりお礼申し上げます。

輝かしい学術業績と社会活動の恩沢を浴したのは、まぎれもなく本学部の学生諸君です。ゼミナール、大学院でのご指導はもちろんのこと、本学部政治経済学科のほとんどの学生が、長きにわたってご担当いただいた日本政治論の講義を受講しました。先生の薫陶を受けた多くの学生が、各界の第一線で活躍しています。優れた研究者としての一面と、人懐っこい朗らかなお人柄とがあいまって、先生の周りには、教員、職員、学生にかかわらず、いつも誰かが同席していたことを記憶しています。その一方で、常に冷静な姿勢からは、大学人としての学びを授けていただきました。ここに重ねて厚くお礼申し上げます。

最後になりますが、岩井先生には、今後とも我々を厳しくかつ暖かく導いて

くださいますようお願い申し上げますとともに、先生のご健康とさらなるご活躍を祈念し、献呈の辞といたします。

2021年（令和三年）3月吉日

日本大学法学部長 小 田 司